



江崎 信芳

えさき のぶよし

京都大学 理事・副学長

みなさん、こんにちは。今日はたくさんお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。京都大学を代表いたしまして御礼申し上げます。

フィールド科学という言葉、なじみがおありかどうか分かりませんが、京都大学を特徴付ける学術分野です。野に出て、自分たちの研究のネタといえますか、何を研究するかということをも自然から学んでくる。人から言われるのではなく、自分で見つけてくる、そういう攻め方の学問です。これが京都大学の伝統でありまして、また京都大学を大きく特徴付ける学術分野といえます。そのフィールド科学を看板に掲げているのが「フィールド科学教育研究センター」です。京都大学にとって非常に大切な教育、研究の組織であります。

いま、白山センター長から説明がありました。このフィールド研が大切に取り組んできましたのが「時計台対話集会」です。名前もおもしろく、いい名前だなあと感じております。七回目を迎えるということですが、続けてきたことで、このユニークな活動が定着してきたと感じています。今回も、たくさんの方々のご支援をいただいております。京都府教育委員会、京都市教育委員会、そしてフィールドサイエティのご後援、また、株式会社村田製作所、全日本空輸株式会社、NPO法人エコロジーカフェ、サイファアソシエーツ株式会社の協賛をいただいております。ありがたいことだと思っております。

本日は、基調講演をお二人の先生にさせていただくことになっております。まず、田中克先生。本学の名誉教授でして、現在、国際高等研究所のフェローでいらつしやいます。この国際高等研究所というのは、前の総長の尾池先生がリーダーとして引つ張っておられるところです。田中先生は、このフィールド科学教育研究センターの設立にご尽力され、「森里海連環学」という新しい学術分野の草分けを担われた方です。二人目のご講演をされる久山慶子先生は、フィールドサイエティーの事務局長を務めておられて、自然体験を通しての子どもたちへの教育という非常にユニークな活動をなさっております。お二人のあと講演いただく天野先生は、アウトドアライターという肩書きでいろいろとご活躍なさっておりますが、この対話集会でもたびたびお話しをいただいております。これらのご講演や報告のあとパネルディスカッションと、今日は盛りだくさんの内容になっております。

今日のテーマは「森里海をつなぐ人づくり」です。日本は本当に美しい国で、自然の豊かな国です。この豊かな自然は、森里海が太い線で結ばれており、それを大切にしておつてきたということですが、最近、この結びつきが危うくなつてきており、自然が悲鳴を上げているという状態になっているようです。人間というのは自然の一部で、自然の恵みの中で、そこに調和して生きていくというのがいちばん大切ではないかと思うのです。そういった世の中を築いていこうと思うと、フィールド科学という学術研究だけではなくて、若い世代、子どもたちに、森里海という結びつきがいかに大切かということを認識していただいて、実際に、結びつきを大切にしていこう、そういう社会を子どもたちが作つていく、それがいちばん大事ではないかと思ひます。そういうわけで、今日の、この七回目の時計台対話集会は、非常に大切なところをテーマに掲げられたなあと感じしております。

この「森里海連環学」という新しい学術分野は大きく成長しており、喜んでおりますが、今日ご参加の皆様方、環境教育であるとか、自然保護の教育であるとか、いろんな場で、また職場等で、「森里海」を考えるきっかけをぜひ作つていただいて、広げていただければありがたいなあと思っております。以上簡単でございますが、あいさつに代えさせていただきます。